School Report

海城中学高等学校 男子校

新しい時代を担う「紳士」となるために

芸術教科で創造力と自己表現力を養う

医学部をはじめとする最難関大学理系学部への進学実績の高さから、首都圏屈指の男子進学校として知られる海城中学高等学校。建学の精神「国家社会に有為な人材の育成」を実現すべく、時代を見据えた教育プログラムを数々導入してきた同校は、美術・音楽・書道の芸術教育にも注力している。表現力を養う多彩な取り組みについて、芸術科主任の天野友景先生に聞いた。

10代だからこそ沸き上がる「表現したい」意欲に応える

1990年代初頭から新たな時代を見据えた学校改革を推し進めてきた海城中学高等学校では、「新しい人間力」と「新しい学力」を兼ね備えた「有為な人材」の育成を目指した教育プログラムを積極的に導入してきた。

トップ進学校として知られる同校だが、実は芸術教育にも力を入れている。中学では音楽と美術を３年間学び、国語の中で書写を行う。高校では２年と３年で芸術の授業が行われており、音楽・美術・書道の中から１科目を選択する。

芸術科目が10代の成長に及ぼす影響について芸術科主任の天野友景先生は「学問や知識、経験を積み重ねていく過程においては、『自分でも表現してみたい』という意欲がわいてくるものです。それを実現できる機会を提供するのが、芸術教科の果たす役割だと考えています。作品を生み出す美術や書道、声や楽器を使って表現する音楽。“内なるものを出す”という点について、芸術ほどふさわしいものはないでしょう」と語った。

芸術科主任・美術科教諭
天野 友景 先生

試行錯誤のプロセスを大切にあえてアナログにこだわる

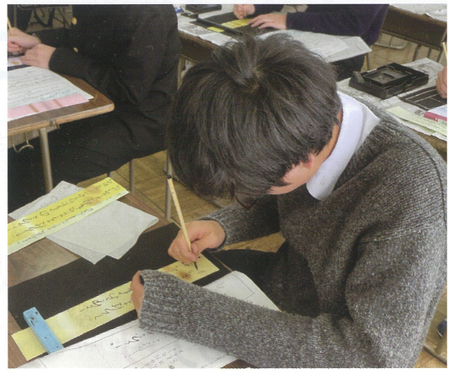
表現の手法を身につけさせるアプローチは３科で異なるが、「共通しているのは、手や声といった身体を使う“アナログ”な表現へのこだわりです」と天野先生は言う。

たとえば音楽では、中高ともに歌唱とアルトリコーダーを中心とした授業を展開している。天野先生が担当する美術でも、中１の１年間はひたすら絵を描かせているという。

２時間続きの美術の授業は、毎回５分間のデッサンから始まる。「描くのは自分の手。どうしたら上手く表現できるかは自分で工夫してもらいたいので、基本は教えますが、あまり細かいアドバイスはしません。1ポーズ完成させるには1か月以上かかりますが、生徒なりに回を重ねるごとの変化を感じ取っているようです」。

２時限目の開始時には、ミニ講座「古今東西美術ばなし」も行う。取り上げるテーマは、西洋画や日本画といたクラシカルな題材にとどまらず、日常にあふれるデザインにも目を向け、美術と社会の繋がりを考えさせる内容になっている。好奇心旺盛な海城生には好評で「これだけで１時間の授業をして欲しい」との要望もあるそうだ。

しかしながら、ほとんどの時間を費やすのはアクリル絵の具を用いた絵画だ。１学期は静物画、２学期は自画像、３学期は想像画に取り組む。「筆と絵の具での表現にこだわるのは、『思ったようにいかない』もどかしさを味わってもらうためです。デジタルツールを使って描く場合、大きさの調整や色の変更など、ほとんどワンクリックで済むものもあります。一方、手描きはそうはいかない。頭の中にあるイメージを実現させるには、試行錯誤の繰り返しが不可欠。さらには『それでも失敗に終わる』ことも多々あります。嫌になることもあるとは思いますが、社会に出るとそんなことは日常茶飯事です。失敗から学び、さらなる創意工夫に挑んでいく精神力も鍛えられていいのではないでしょうか」と天野先生は笑顔で話す。



左：美術の授業では、中学ではアクリル画、高校では油彩に取り組む。１人ひとりがキャンバスに向き合い、真剣な面持ちで描いている
右：書道の授業は先人の筆跡から文字造形や筆づかいを学ぶ「臨書」から、自分の表現を追求する「創作」へと発展していく

自己を見つめ、絵に表す 10週間かけて完成させる自画像

２学期には10週にわたり自画像に挑戦するのも永年続く試みだ。思春期の男子にとって、自分の顔を描くとはなかなかハードルの高い課題だと思われる。「先に友達の肖像を描くのですが、葛藤や戸惑いは、そのときの比ではありません。自分の顔をしげしげと見ることすらない年頃ですから当然といえば当然。とはいえ、意外に思われるかもしれませんが、真剣に取り組んでくれます。自分自身と向き合い、キャンバスに表現していくうちに、新たな一面を知ることもあるようです。完成後には個々の作品を鑑賞する機会も設けますが、友人の評価から『思いもしなかった事に気づかされた』と言う生徒もいます」とのことだ。

選択科目となる高校の美術では、油彩に取り組み、２年では静物画と風景画、３年では１・２学期をかけて修了制作を行う。「進学校として、高３でも必修の芸術科目を設けているのは珍しいかもしれませんが、『勉強に邁進するなかで週1時間、自分と向き合い表現する時間は貴重』と生徒たちには好評です。歴史や国語の分野での教養を身につけてから芸術に触れると、興味も理解もぐっと深まるもの。教える側からしても、最終学年だからこそ学ぶ意義を確信しています」。

自分たちの望む音楽室とはリノベーション計画に生徒も参加

表現することへの意欲は、授業以外の活動にも波及している。2023年から2024年夏にかけて行われた音楽室のリノベーションには、「KAIJO DESIGN TEAM」の生徒が参加した。こちらのチーム、もともとは「生徒たちの興味・関心を引き出す」ことを目的に設置された教科横断型の特別講座「KSプロジェクト」において、技術科・美術科の教員によって開設されたもので、現在は中１から高２までの31名の生徒が参加している。設立理念は「デザインを通して、学校に新たな価値を創造すること」。それを実現すべく、過去には、海城オリジナルグッズや、オープンキャンパスのポスター、俳句甲子園代表チームのＴシャツなどの企画を生徒主体で手掛けてきた。

音楽室のリノベーションにあたっては、3DCADなどのデジタルツールを駆使し、音楽室のデザインを考案。３つのチームに分かれて、教師・生徒の要望を反映したプランを練り上げ、学校側にプレゼンテーションを行った。施工の着手にあたっては、学校事務や施工業者と協力しながら、予算や施工の現実性を考慮してのプラン調整にも携わった。理想だけで終わらず、現場で働く人々と協働する経験は、精神的な成長だけでなく、大きな達成感や自信にもつながったことだろう。

最後に、今後の展望について天野先生は次のように語ってくれた。「授業で培った成果や作品を、披露できる場をもっと増やしていきたいと考えています。どんなに良いものができても、表に出さなければ意味がありません。現在、美術室の廊下に面した壁には、ギャラリーと称して、生徒が授業中に描いた絵を飾っています。展示する作品は定期的に入れ替えていますが、自分の作品が選ばれると、やはりうれしそうです。イベントとして展示の機会を作るというよりは、誰かが表現した芸術が、自然と学校生活に溶け込んでいるというのが理想です」。

教育理念に“リベラルでフェアな精神を持った「新しい紳士」の育成”を掲げる同校。芸術を楽しむ素養と、自己を表現するセンスを兼ね備えることは、国際社会で活躍する“紳士”には必要不可欠な要素といえそうだ。

海城中学高等学校

東京都新宿区大久保3-6-1
TEL.03-3209-5880
www.kaijo.ed.jp